２０２１年１１月７日聖霊降臨後第２４主日説教

列王記上 17 章 8-16 節
ヘブライ人への手紙 9 章 24-28 節
マルコによる福音書 12 章 38-44 節

「聖餐式聖書日課」Ｂ年は、「マルコによる福音書」を連続して読み進んで来ましたが、それも本日の後は、残すところ一回となりました（降臨節前主日・聖霊降臨後最終主日は選択になっています)。「マルコによる福音書」には、１１章以降も特徴的なお話があるのですが、「聖餐式聖書日課」では、それらのほとんどが省略されています。それゆえ、本日は、その他の箇所を少し補いながら、福音書を中心に学んでいきたいと思います。

本日の福音書には、新共同訳の小見出しで「律法学者を非難する」と「やもめの献金」とある通り二つのお話があります。先週の箇所で、一人の律法学者は、最も大切な教えを示し、イエス様から評価されましたが、その律法学者は例外的存在でした。ここでイエス様はふたたび律法学者を批判しています。「マルコによる福音書」という物語の中で、律法学者たちは他の社会的・宗教的権威者とともに、イエス様と敵対する関係であるからです。

本日の箇所の直前で、イエス様は、「**どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか**」と、彼らのメシアに関する見解を批判します（マルコ 12：35-37)。その部分は聖書日課にはありませんが、本日の前半部分は、その律法学者への批判の続きともいえるのです。

本日の個所で、イエス様は群衆たちに語る教えの中で、律法学者を大変厳しく批判しています。「**律法学者に気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ることや、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを望み、また、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる**」（マルコ 12：38-39)。ただし、イエス様の時代のすべての律法学者が、このような人たちだったわけではありません。律法学者、ことにファリサイ派の律法学者は、日々の生活に律法の教えを厳しく生かそうとする、真面目な人たちでした。具体的例をあげれば、パウロがそうです。パウロは、極めて真面目で、律法を守ることに熱心でした。おそらく、イエス様が批判しているような振る舞いはなかったと思います（だからこそ、当初は律法解釈にあわない、十字架に架かって死んだメシア・キリストを、受け入れられなかったのですが)。イエス様が批判するような律法学者が、まったくいなかったかというとそうでもなかったと思います。そのように考えますと、イエス様のここでの強い批判は、物語世界の中での事柄ということになりますが、物語世界の中でのお話であるがゆえに、大切な意味があります。

イエス様が律法学者を批判した理由、その第一は、律法が単なる法律ではな

いということです。ただし、すべての法律を相対化して見るとき、ユダヤ教の律法も他の文化にある法律と同じといえます。そして、それゆえにそれを解釈する律法学者にも善い人も悪い人もいる、そう考えるのは当然のことと思います。しかし、律法はそうではないのです。律法は、わたしたちが聖書から学んでいます通り、主なる神様がイスラエルに与えたものです。つまり、主なる神様の愛が最初にあり、その愛に人間が応える方法として、与えられた教えです。その意味で律法は、人間が人間の考えで作成し、解釈し、時には改正していくような一般的な法律とは根本から異なるのです。それゆえに、律法は、信仰的事柄だけではなく、一般的な法律と同じようにありとあらゆる生活の事柄にも関係する法律ですが、経済的な事柄に関して言えば、貧しい人、弱い人の存在を、社会の中で固定化することを許さないのです。ましてや、富める人、強い人が、貧しい人、弱い人を虐げるための根拠に用いられることなど、あってはならないのです。それは主なる神様が「よし」とされない事柄であるからです。しかし、実際には、そうでななかった。ことにその律法の主旨を自覚していない律法学者もいた、イエス様はそのことを強く批判しているのです。

後半部分のお話では、ひとりのやもめに焦点が当てられています。「旧約」において寡婦は、寄留者や孤児と同様に、社会から見放されないこと大切だと記されています（出エ 22：21、申 10：18、14：29、24：19 など）。しかし、同時に、実際にはそうでもなかったことも記されています（イザヤ 1：23、10：2、知恵 2：10）。本日の旧約日課も、その一例です。サレプタのやもめは、エリヤに出会わなければ、生きていけなかったかもしれません。「**あなたの神、主は生きておられます。わたしには焼いたパンなどありません。ただ壺の中に一握りの小麦粉と、瓶の中にわずかな油があるだけです。わたしは二本の薪を拾って帰り、わたしとわたしの息子の食べ物を作るところです。わたしたちは、それを食べてしまえば、あとは死ぬのを待つばかりです**」（列王 17：12）という記述を見ますと、彼女は、主なる神様への信仰を持ちつつも、厳しい現実に中にありました。本日の福音書に登場時するやもめも、苦難の中にあったようです。

物語は、イエス様が群衆を教える光景から、急に場面が変わり、「**イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた**」（マルコ 12：41）となります。イエス様の時代のエルサレム神殿には、賽銭箱がありました。自由献金を入れる場所です。おそらく神殿の境内地の中、神殿の建物の入り口付近にあったのだと思います。イエス様は、その賽銭箱へお金を入れる様子を、座って見ておられたようです。イエス様が、どれぐらいの時間見ていたのかわかりませんが、巡礼に来た人や、観光に来た人などの声が、聞こえてくるような、なんとなくのどかな情景のように思えます。しかし、イエス様は、次々と神殿を訪れ、お金を入れる人々の中に、レプトン銀貨二枚を入れたやもめの姿を、見逃しませんでした。

やもめの入れたお金は、「**レプトン銅貨二枚、すなわち一クァドランス**」（マ

ルコ 12：42）とあります。このお金が、現代でいえば、どれぐらいの価値になるのか、それを正確に検証するのは難しいのですが、だいたい二レプトンは、今の日本円で１００円ぐらいと考えればいいと思います。

イエス様は、そこから弟子たちを呼び寄せて教えます。「**はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである**」（マルコ 12：43-44）。イエス様が、なぜそれが彼女の生活費のすべてであったとわかったのかはここでは問いません。大切なのは、イエス様が、このやもめを高く評価したことです。つまり主なる神様が求めているのは、金額の多さではないと示してことです。なぜそのようなことがいえるのか、それは主なる神様への思いは、先週の律法学者が示したように、そのまま同じく、隣人に対する思いにもなるからです。逆に言えば、隣人に対する思いの欠如は、主なる神様への思いの欠如になる。イエス様は、そう語っているのです。

先に律法について触れた通り、主なる神様が愛される世界では、豊かな人、貧しい人という格差があってはなりません。それが生じてしまったとしても、出来る限りそれがなくなるように、律法は求めています。しかし、今、物語世界の中で、主なる神様の神殿で繰り広げられる光景は違います。豊かな人もいれば、貧しい人もいる。豊かな人は、一人の貧しいやもめの、何倍もの献金をしている。それは、立派な行為をしたようにも思えるが、同時に、豊かな人たちが、貧しいやもめの存在に気づいていなかったことを示しています。つまり、神殿で献金をしながらも、主なる神様の存在に気づいていないことと同じです。

神殿にたくさん献金した人は、自分はそれだけ主なる神様を大切にすることに貢献し、また間接的に隣人も大切にしていることにも貢献していると思ったかもしれません。しかし、すぐ近くに困ったやもめがいることに気が付かない点で、それらは虚しいものになります。主なる神様がおられるとされるエルサレムの神殿に仕える祭司たち、祭司たちこそが、このやもめの存在に気付くべでしたが、そうではなかったのです。そして、貧しい人への配慮を求めている律法を、解釈して実行すべき律法学者も、このやもめの存在に気づいていなかったのです。

イエス様は、この教えをことに弟子たちに向けて語っていますが、それはもし読者が弟子たちに注目して物語に触れていたとするならば、読者に直接教えていることにもなります。そして、ここで神殿への献金のことを話題としていますが、教えが意味していることは、先週の箇所、物語としては、すぐ前で示された「もっとも大切な教え」を、誰が実行したのかということです。それは多くの金額を捧げた人々ではなく、全部を捧げた人です。

それでは、このやもめがどうして、先週の大切な教えを実行したことになるのでしょうか。それは、彼女が、すべてを通して愛してくださる主なる神様

に、自分も全てを通して応えたからです。自分の持っているすべてを、自分のためではなく、主なる神様のために、そして主なる神様のおられる神殿を通して、誰かのために捧げたからです。それは、おそらく捧げるという姿ではなく、主なる神様に自分のことを、訴えたという姿であったとかもしれません（だからイエス様は気づいたのかもしれません）。しかし、そのように人間の訴えを受け止めてくださるのが、主なる神様です。わたしたちの信じている、主なる神様なのです。今ある自分の幸せや喜びを、主なる神様に報告すること、感謝することも大切です。しかし、本当につらい時や疑問に思う時も、わたしたちは、主なる神様にそれを投げかけてよいのです。この物語のやもめの姿は、そのことをわたしたちに伝えていると思います。

このやもめが、その後どうなったのか、物語は何も示しません。しかし、イエス様を主とする教会は、のちに教会の役割として、自分たちの教会に属するやもめが、不自由な生活にならないようにと配慮すること、そのことを教会の働きとして位置付けました（１テモテ５：3～、ヤコブ１：27）。その働きが、どれぐらいの規模であったかわかりませんが、ローマ帝国内にあって、小さい愛の行為を実践していたことは、確かであると思います。そのことから推測しますと、弟子たちは、きっと別の機会に、そのやもめに声をかけたとのだと思います。

教会は、ローマ帝国という社会の変革を求め、またそれを目指した集まりではありませんでした。また、イエス様の生きたイスラエルと、ローマ帝国内の各地域とは、少しいろいろな条件が異なります。すくなくとも、ローマ帝国内では、ユダヤ教の律法が強く働くことはありませんでした。しかし、教会は、律法がイスラエルに求めたように、その小さなまじわりの中で、やもめなど厳しい条件の中にいる人々の悲しみが、少しでも減るために歩んでいたことは確かです。つまり「マルコによる福音書」という物語を通して、イエス様について学び、教会の中でその教えを具体化していたということです。

現代のわたしたちが生きている日本という環境は、この物語の環境ともローマ帝国内の環境とも異なります。しかし、「マルコによる福音書」という物語を通して、イエス様について学んでいる教会という意味では同じです。最初の教会は、主なる神様の愛に基づいたまじわりを目指していました。それはあらゆる隔ての壁を超えた、人と人との気持ちや心をつなぐまじわりを目指していたということです。現代のわたしたちの教会も同じ事柄を目指すべき存在です。そして、このまじわりが、少しでも世界に広がることを望みながら、歩み続けることが大切です。この世界から少しでも悲しみがなくなるように、また悲しみがあったとしても、共に悲しみ、そして共に慰められるように、教会というまじわりを通して歩み続けていきたいと思います。